朝日新聞

2009年(平成21年)12月5日　土曜日

ひと

生きる支援をしたい。「自殺対策に取り組む僧侶の会」代表

藤澤(ふじさわ)　克己(かつみ)さん(48)

自殺防止の啓発をうたって国がもうけた「いのちの日」の1日、東京都内の寺院で「自死者追悼法要」を主宰した。6宗派の会員ら僧侶50人がいとなみ、自殺した人の遺族107人が参列した。今年で3回目。名古屋でも仲間が4日に初めておこない、大阪では9日に開く。

都内港区にある安楽寺の住職だ。生死(しょうじ)にかかわる僧侶として、死を思いつめた人や遺族を救うために何かできるはずと思いたったのは数年前。会では月1回の遺族との集いや悩む人、遺族との手紙相談もしている。手紙は1390通になった。

悩みに耳を傾ける電話相談員でもある。「死にたい」と電話を受けたとき「そうじゃなくて、生きているのがつらいんですよね」と投げかける。すると、みながいう。「そうです、死にたいわけじゃなかった」と。何年たっても悲しみが消えない遺族に接し、救おうなんて思いあがっていた、と思う。「私にできるのは話を聞いて寄り添うこと」

早稲田大を卒業後、IT企業に就職し、多くのプロジェクトを率いた。父親が先代の住職。「寺を継ぐからには、うんとやりがいのあること、人の役にたつことを」と宗派を超えての自殺対策を呼びかけた。

自殺をめぐる講演や研修で語りかけるときは、若草色の僧衣をまとうことが多い。近寄りやすくて、なんだかほっとする色だ。「いつも元気いっぱいでなくていい。安心して弱音がはける社会にしなきゃ」

文・河合真美江　写真・林正樹